

チェコ共和国の言語状況、言語政策および外国語教育事情

金指久美子

1. チェコ共和国の言語状況
 - 1.1. 20世紀における言語状況の変遷
 - 1.1.1. 戦間期
 - 1.1.2. 第二次世界大戦中
 - 1.1.3. 第二次世界大戦後
 - 1.1.4. ビロード革命後
 - 1.2. 現在の言語状況
 - 1.2.1. マイノリティ言語
 - 1.2.1.1. ドイツ語
 - 1.2.1.2. ポーランド語
 - 1.2.1.3. ロマ語
 - 1.2.1.4. スロヴァキア語
 - 1.2.1.5. 新たなマイノリティ言語
 - 1.2.2. 現代のチェコ語
2. 現代チェコの言語政策
 - 2.1. マイノリティ言語に対する政策
 - 2.2. チェコ語の政策
3. 外国語教育
 - 3.1. 20世紀の流れ
 - 3.1.1. 第二次世界大戦終了まで
 - 3.1.2. 戦後
 - 3.2. 最近の状況
4. 現地調査報告
 - 4.1. 書店での調査
 - 4.2. 授業見学とインタビュー
5. 結論にかえて

1. チェコ共和国の言語状況

1.1. 20世紀における言語状況の変遷

1.1.1. 戦間期

20世紀に入って、チェコの言語状況が大きく変化した最初のできごととして、1918年のチェコスロヴァキア共和国誕生が挙げられる。これを機に、行政機関におけるドイツ語との競合関係は終わりを告げ、かつてドイツ語が支配していた軍事、通信、法曹関係の用語をチェコ語で整備する必要が生じたからである。そして、教育制度とジャーナリズムがさらに発達したことにより、標準チェコ語がより広い社会階層へ浸透していった。標準チェコ語はスロヴァキアへも広がっていく。現地の役所や教育機関へチェコ出身者が数多く送り込まれたためである。同時に、経済的な理由により多くのスロヴァキア人が職を求めてチェコへやってきた。互いに理解しあえるほど近い関係にありながら、標準語の成立過程ひとつとっても別々の道を歩んできたチェコ語とスロヴァキア語が、このときから意識しあうようになり、微妙な緊張関係が生じた。

新しい国家、チェコスロヴァキア共和国には「チェコスロヴァキア語」という1つの言語があり、チェコ語とスロヴァキア語はこの言語の2つの文章語ヴァリエントであると主張する研究者が少なくなかった。ひとつの国家としてひとつの言語でやっていこうという考え方ではあるが、これは政治的、社会的にチェコ語が優位に立っている状況下で生まれたものであり、スロヴァキア語の方に歩み寄るよう、暗に促していた。実際、1920年代、30年代にチェコで出版された辞書や研究書には、「チェコ語およびスロヴァキア語の……」というタイトルが多い。まず、チェコ語について語り、次にスロヴァキア語について語っている。

公的な場からドイツ語が撤退したとはいえ、人口の20パーセントを超える¹強大なマイノリティであったドイツ系住民は法律により保護されていた。ドイツ語で教育を受け、役所や司法の場でもドイツ語を用いる権利が保証されていたのである。当時はチェコ語の知識がなくても、それほどの困難に出会うことなく暮らしていった (Povejšil 1998:48)。

この時代、特筆すべきことはロシア革命から逃れてきたロシア人、ウクライナ人が大挙してチェコスロヴァキアへやってきたことであろう。初代大統領のマサリクの方針に従って受け入れたためである。首都プラハは、このような亡命者たちの一大拠点となった。政府は彼らのためにロシア語およびウクライナ語で教育する教育機関を幼稚園から大学まで作り、その運営を経済的に支援した。ロシア革命は一時的な現象であり、彼ら亡命者・難民もこの国に長くとどまることはないと予想していたので、負担もそれほど大きくないと

¹ 1921年には、全体の30,6%が、1930年には29,5%がドイツ人だった。(ČSÚ 2006:6.)

見ていたのである。しかし、ドイツの圧力が強くなり、しかもソヴィエト連邦がチェコスロヴァキアにとって重要な輸出市場として成長した 1930 年代に入ると、ロシア人もウクライナ人もチェコを離れていった (Neustupný a Nekvapil 2003:211-212) ²。

1.1.2. 第二次世界大戦中

ボヘミア・モラヴィア保護領の時代 (1939-1945) には、チェコ語とドイツ語の併用が法的に定められた。店の看板、公的な施設のプレート、切符、身分証明書など、社会生活のありとあらゆる場面で登場するもの、あるいは用いられるものが、二言語表記となったのである。ラジオ放送も、はじめにドイツ語で、次にチェコ語でおこなわれた。また、プラハのホレショヴィツェ地区には「小ベルリン」Malý Berlín と呼ばれる一画ができるほど、ドイツ語話者が大勢やってきた。この状況にあわてて対応しなければならない人も多かったようである。この時期、さまざまな職業に就く人のためのドイツ語-チェコ語専門用語集が、職業ごとに出版されている。たとえば、警官のための用語集、郵便局員のための用語集、理髪師のための用語集などがある (Povejšil 1998:48)。

1.1.3. 第二次世界大戦後

第二次世界大戦後、チェコの言語状況は再び大きく変化する。1945 年に発布された一連の「ベネシュ法令」をきっかけにチェコにおけるドイツ語話者が著しく減少した。この年、大統領ベネシュは大統領令を次々と出し、ドイツ系住民の財産凍結・没収、権利の制限を決定し、さらに翌年からは組織的な強制移住がおこなわれたからである。上述のごとく、共和国全体の 20 パーセントを越えていたドイツ系住民は、1950 年の人口調査では 1,8 パーセントにまで一気に落ち込んでいる (ČSÚ 2006: 6)。スロヴァキアでは類似の措置がハンガリー系住民に対してなされた。しかも東部のポド・カルパチア地方を失う。ソヴィエト連邦 (ウクライナ共和国) の帰属となったからである。これによって、スロヴァキアにおけるハンガリー語話者およびルシン語話者が著しく減少する。かくして、戦後のチェコスロヴァキアは、チェコではチェコ語話者が、スロヴァキアではスロヴァキア語話者が圧倒的多数を占める国家として、スタートを切ることとなった。

チェコ語とスロヴァキア語の関係は以前の共和国時代と異なり、両言語を別個の言語として平等に扱おうとし、そのためにさまざまな措置が講じられた。学校では互いの言語を学びあい、ラジオやテレビの放送は二言語併用が義務づけられたのである。外国語教育の様相も変化した。1950 年代に始まる、ロシア語教育の義務化である。国家機関で働くため

² 教育機関への補助は第二次世界大戦が終わるまで続いていた。

には、あるいは軍の幹部になるためにはロシア語の知識が要求される状況がビロード革命まで続いた。

1.1.4. ビロード革命後

1989年のビロード革命は政治的・経済的・社会的な大変動であり、現在のチェコ人の生活にも大きな影響を与えた。加えて、1993年にチェコ共和国とスロヴァキア共和国が分離独立する。1990年代初頭はチェコが20世紀に迎えた3度目の大きな言語状況の大転換である。分離独立を境にチェコ語とスロヴァキア語を意図的に併用する必要がなくなった。1993年以降、チェコの学校でスロヴァキア語を授業で教えなくなった。実際、チェコ人、スロヴァキア人ともに大多数がチェコ語とスロヴァキア語は今後乖離していくと予測しながらも、それを特に悲しむことではないと判断している（Lipowski 2005: 172）。

以上、一般の人々の言語観にはそれほど大きな差はないが、チェコとスロヴァキア、それぞれの国家がとった国語政策は対照的である。スロヴァキアはいち早くいわゆる「国語法」を制定し、スロヴァキア語がスロヴァキア共和国における唯一の国家語 *státní jazyk* と定めたのに対し、チェコではいまだこのような法律が制定されていない（第2章参照）。

1.2. 現在の言語状況

1.2.1. マイノリティ言語

2001年の統計によると、チェコ共和国の全人口の94,9パーセントがチェコ人³である。しかも、国内に居住する他の民族の中にもチェコ語が母語の人がいる。結果として全人口の約95パーセントが、母語はチェコ語であると申告している（ČSÚ 2006: 32）。つまり、この国には、かつてドイツ語が占めていたような位置にあるマイノリティ言語は存在しないといえる。

1.2.1.1. ドイツ語

既述のごとく、第二次世界大戦後にチェコにおけるドイツ語話者は著しく減少した。ボヘミア・モラヴィア保護領時代の「支配言語」という悪いイメージがつきまとっていたこともあって、第二次世界大戦後、チェコに残ったドイツ系住民はドイツ語を使う機会を奪われていた。しかし、1950年代には東ドイツの経済的な支援を受けて、ドイツ語の週刊誌

³ 本論では「チェコ人」とまとめたが、統計では「チェコ人（ボヘミア人）」「モラヴィア人」、「シレジア人」に分かれている。細かく見るとチェコ人（ボヘミア人）90,4%、モラヴィア人3,7%、シレジア人0,1%である。

やドイツ語のラジオ放送も始まった。この支援はビロード革命まで続く。1968年になって、自らの言語で教育を受ける権利が憲法で保証されたが、ドイツ語で教育をおこなう学校は開校されなかった。すでに十分な生徒数が見込めなかったからである。とはいえ、彼らは現在のチェコ共和国領内に1000年以上にわたって住み続けている人々であり、今でも北ボヘミアおよび北西ボヘミアを中心に約40000人が居住している。この人数はチェコ共和国全体の0,4パーセントに当たる(ČSÚ 2006: 6)。しかし、現在、彼らが「自然に」ドイツ語・チェコ語のバイリンガルになる可能性はきわめて低い。彼らの母語は若い世代を中心に、チェコ語に切り替わりつつある。1990年代以降、チェコ人の配偶者のいる家庭が飛躍的に増えたことも理由のひとつに挙げられる。高齢者はドイツ語を話す、彼らのドイツ語は方言の要素がかなり強く、ドイツからやってきたドイツ人とドイツ語でコミュニケーションをとることを恥ずかしがる(Neustupný a Nekvapil 2003:276)。

現在のチェコ人にとって、ドイツ語はマイノリティの言語というよりむしろ、熱心に学ぶ外国語である。ドイツ語で教育をおこなう私立の小学校やギムナジウムがプラハにできているが、これはドイツ系住民のためというよりも、ドイツ語を身につけたい(身につけさせたい)ものすべてに開かれている。

1.2.1.2. ポーランド語

もともとチェコ国内に根を下ろしていた伝統的マイノリティの言語としては、ドイツ語以外にポーランド語が挙げられる。ポーランド系住民はポーランドとの国境近くのチェスキー・チェシーン、トシネツ、カルヴィナー、ハヴィージョフといった町を中心に50000人ほどが暮らしている(チェコ共和国全体の0,5パーセント)⁴。第一次世界大戦後の国境を定める際に、チェコ領内に組み込まれた地域である。方言学的にいえば、「チェコ語・ポーランド語混交地帯」と呼ばれる地域に相当する。ここに住むポーランド系の人々は、ポーランド語のシロンスク方言に類似した構造をもつチェコ語の西チェシーン方言、この方言の要素を多く持ち込んだ標準チェコ語、およびこの方言の要素を多く持ち込んだ標準ポーランド語を時と場合に応じて使い分けている。たとえば、家族、友人など狭い範囲では地域方言を用いる。「狭い」とは規定したが、近所での買い物、職場の同僚、市内交通機関でも地域方言が用いられることがある。しかし、学校、役所、病院などでは、標準チェコ語に切り替わる率が高まる。この場合、いわば「高い」側(教師、役人、医師など)がど

⁴国境近くに居住する人々の他にも北ボヘミア、東ボヘミア、中央ボヘミアにもポーランド人が住んでいる。数千人が長期滞在許可を得て労働者として働いているためだが、チェコ共和国内のポーランド語という観点から見ると、どうしても伝統的な国境付近の人々に注意が向きやすく、報告も多い。

の言語でコミュニケーションするのか決定し、もう一方はその言語に合わせる傾向が見られる (Lotko 1998:40)。下記に示すようなポーランド語で教育をおこなう学校では標準ポーランド語が使われるが、ポーランドのポーランド人との接触が限られていたため、標準ポーランド語会話で用いられる「洗練された」文体に自信のない人が少なくない。実際、ポーランドから来たポーランド人と会話する際、彼らは困難を感じているという (Neustupný a Nekvapil 2003:270)。

ポーランド系住民のために、幼稚園、小学校、中学・高校レベルでは、ポーランド語による教育をおこなう学校がある⁵。これらのほとんどは大戦間に創設された。現在、チェコ語は小学校2年生から学び始める。しかし、1960年代を境に生徒の数は減る一方であり、閉鎖される学校も増えつつある。理由としては、少子高齢化、親の一方がチェコ人という家庭の増加、学校網の不整備が挙げられる。しかも、子どもの将来を考え、両親ともポーランド系の家庭でも子どもをあえてこのような学校に送らないという選択をするケースも増えてきている。とはいえ、この地域にはポーランド語書籍の図書館、ポーランド語で演じる劇場、ポーランド語放送があり、ポーランド語の文化活動を支える力はいまだにしっかりと続いている (Neustupný a Nekvapil 2003:207)。

1.2.1.3. ロマ語

チェコにもともと住んでいたロマ人は、遅くとも15世紀初頭にはやってきたと考えられている。しかし、彼らはボヘミア・モラヴィア保護領の時代に事実上一掃されてしまった。現在チェコ共和国内に居住するロマ人は、第二次世界大戦後にスロヴァキアからやってきた人々である。2001年の人口調査では、11000人程度ということになっているが、この調査の民族に関する事項は自己申告制である。実際にはもっとずっと多く、200000人から300000人いるのではないかと推測されている。彼らの中にはスロヴァキア人であると申告する人がいることが知られている。伝統的マイノリティといえるかどうかは別として、チェコ国内には事実上2, 30万人のロマ人が居住していること、彼らは差別の対象であり続け、失業率も非常に高いことから、ロマ人をめぐる問題は解決が急がれる大きな問題である。

ロマ人の数が統計と実際でかなりかけ離れているため、ロマ語話者の数も正確にはつかめない。2001年の調査では、ロマ人と申告した人数の1,98倍の人々が、母語はロマ語であると回答している (ČSÚ 2006: 32)。スロヴァキアからチェコにやってきた人々およびその

⁵ 2003年現在、幼稚園3校、小学校19校。中等教育機関のデータは2004年で、6校。うち、ギムナジウム3校。Zpráva2005: 40-41.

子孫である彼らの大部分が話すロマ語は、「スロヴァキア・ロマ語」と呼ばれている。スロヴァキア語の語彙、文法、音声的特徴を備えているからである。このロマ語はさらに、東ヴァージョンと西ヴァージョンに分けられる。その他、もともとはハンガリーに住んでいたが、スロヴァキアを經由してやってきた人々の話す、「ハンガリー・ロマ語」、チェコのヴラフ地方に残る「ヴラフ・ロマ語」の話し手がチェコにいる。中年層、老年層のロマ人はロマ語に加えてさらに1言語ないし2言語を操る。しかし、現在ロマ語を能動的に使いこなせるロマ人は若い世代には極めて少ない。政府が子どもに教育を受けさせるように、職業につくように積極的に働きかけたため、チェコ語を身に着けないと暮らしていけなくなっているのである。小学校からチェコ語による教育が始まるため、子どもたちのロマ語の能力は受動的、すなわち聞けば分かる程度となっている。では、ロマ人の若い世代は、チェコ語話者なのかというと、そうともいいきれない部分がある。学校に通う前の子どもの語彙数を比較すると、ロマ人の子どもは400語なのに対し、チェコ人の子どもはその10倍近くもっているという（Kamiš 1998:55）。当然、チェコ語で教育をおこなう小学校の授業についていけないロマ人の子どもはチェコ人の子どもよりも多い。「特殊学校」へまわされる子どもの率も高くなる⁶。結果として、中等および高等教育機関に進学するロマ人の数も少なくなり⁷、彼らのチェコ語の能力も高められない。

この状況を改善するために、「準備クラス」が設けられた。1998年、ロマ語を使うロマ人アシスタントを雇ってロマ人の子どもが学習しやすくした。2001年末までに264人のアシスタントが雇用されたが、このようなアシスタントのいないロマ人居住地もまだたくさんある。（Zpráva2002:33）

ロマ語で教育をおこなう学校を作ってみたらどうか、とも考えられるが、それも現実的ではないという。上述のように、チェコ国内で話されるロマ語は一様ではなく、大きく3つのグループに分かれ、またグループ内の方言の差もある。まず、教育にどの方言を採択するか決めなければならず、そうでなければ「標準ロマ語」を新たに作り上げなくてはならない。目下のところ、「標準ロマ語」の制定には成功していない。そして、教師不足もおそらく問題となることであろう。教師となるべき世代の人のロマ語の能力は受動的であり、高等教育まで受けた人は少ないからである。

ロマ語で教育をおこなう機関はないが、ロマ人がロマ語の運用能力を向上させ、ロマの

⁶ 文化の違いをチェコ人の教師が理解していないため、知力が低いと判断されてしまうケースも指摘されている。（Neustupný a Nekvapil 2003:267）

⁷ 2001年の統計資料によると、チェコ共和国内に居住するチェコ人およびポーランド人のほぼ10パーセント、ドイツ人の約6パーセントが大卒であるのに対し、ロマ人は1,6パーセントにとどまっている（ČSÚ 2006: 17）。

歴史、文化を学びつつ職業訓練を受ける中等教育機関と成人向けの学校はほぼ 10 年前にできた。1997 年、プラハにあるプロテスタント・アカデミーの中にできたロマ・アカデミーが成人向けの機関であり、翌年コリーンにロマ社会中等学校 *Romská střední škola sociální* が創設されている。さらに、2000 年から 2001 年にかけてロマ語のテレビ講座が放映された⁸。また、1991 年、カレル大学にロマ語専攻コースが創設された。ロマ人だけではなくチェコ人の学生も学んでいるが、卒業生は教師もしくは準備クラスのアシスタントとなるべく期待されている。こうして、貧困や高い失業率なども含めたチェコのロマ人たちの抱える問題を解決すべく、言語面でも専門家たちの取り組みが始まっている。

1.2.1.4. スロヴァキア語

以上、ドイツ語、ポーランド語、ロマ語が「伝統的」マイノリティ言語⁹としてよく取り上げられるが、実際には、チェコ共和国内に居住するスロヴァキア語話者数が最大である。2001 年の調査ではおよそ 20 万人のスロヴァキア系住民（全人口の 1,9 パーセント）のうちのほぼ 80 パーセントがスロヴァキア語を母語としている（ČSÚ 2006: 32）。しかし、スロヴァキア語はチェコ語と互いに理解し合えるほど言語的に近く、チェコ人とスロヴァキア人が結婚するケースも非常に高いということもあって、チェコでスロヴァキア語を守り育てようとする活動はそれほど活発ではない。チェコに居住するスロヴァキア系住民は、職場や学校など公の場ではチェコ語を使う。スロヴァキア語は家庭でしか用いない。また、スロヴァキア語で教育をする学校に対する関心もあまり見られない。およそ 2 万人のスロヴァキア人が住む首都プラハですら、このような学校がひとつもないのである。1990 年代の半ば、スロヴァキア語で教育をおこなうギムナジウムを創設しようという計画がもちあがったが、最低でも 20 人生徒が欲しかったところ 8 人しか応募がなかったので、結局開校には至らなかった。カルヴィナーにただ一校、スロヴァキア小学校があったが、20 世紀の終わりとともに姿を消した（Neustupný a Nekvapil 2003:264）。しかし、この 5 年で状況は少

⁸ Neustupný a Nekvapil 2003:267-268 には、このような取り組みが紹介されているが、「標準ロマ語」が制定されていない段階でどのロマ語を教育しようとしているのか不明である。

⁹ 1934 年に出版されたチェコスロヴァキア誌研究第 3 巻、『言語』には、クロアチア語もマイノリティの言語として取り上げられている。それによると、16 世紀に戦乱を逃れてクロアチアからやってきた人々の子孫が住む集落がチェコ領内（南モラヴィア）とスロヴァキア領内（西スロヴァキア）に点在していた。南モラヴィアに居住していた人々はチャ方言の話し手である。しかし、すでにこの記述のされた 1930 年代前半の段階で、クロアチア語からドイツ語への切り替えが進み、自分たちはドイツ人であると名乗る人々も少なくないと報告されている。Vážný, Václav. *Mluva charvátských osad v republice Československé*. in: *Československá vlastivěda, díl III. JAZYK*: 518-523, 1934 Praha SFINX. 第二次世界大戦終了後、1948 年にクロアチア系の人々も強制的に退去させられ、集落が崩壊した。そのため、現在では、クロアチア語はチェコの伝統的マイノリティ言語として取り上げられることはない。

し変化した。スロヴァキア国内のチェコ人がチェコ語を使えるようにするためには、チェコ国内のスロヴァキア人にも配慮する必要があることにチェコとスロヴァキア両政府が気づいたからである。現在はスロヴァキアとの間に相互協定を結んで、職場や大学でチェコではスロヴァキア語を、スロヴァキアではチェコ語を母語として用いることができるようになっている (Zpráva2005:43)。

1.2.1.5. 新たなマイノリティ言語

1990年代以降、急激に増加しているのがウクライナ人とヴェトナム人の長期滞在者である。2008年の2月29日現在、チェコ国内に長期滞在している外国人合計160,828人のうち、ウクライナ人は最も多く33,927人、次に多いヴェトナム人もほぼ同数の33,108人である。これら「新」マイノリティ言語の話者に対しては、チェコ語をどのように学習させるかという方に重心が置かれている。もっとも、ウクライナ人の中にはロシア語が母語というものも少なくないので、新マイノリティの言語はウクライナ語、ロシア語、ヴェトナム語の3言語と考えられる。このうち、ロシア語は第二次世界大戦後半世紀近くにわたって外国語教育の中心であったし、現在のチェコでも選択肢のひとつとして教育機関に用意されている外国語なので、残るウクライナ語とヴェトナム語とは扱いが当然異なる。

1.2.2. 現代のチェコ語

ここ半世紀以上、続いている現象が「均一化」である。標準語教育が浸透したために、この言語を能動的に使いこなせるものも増えた。それに伴い、方言が消えつつある現象のことを指す。同時に、均一化とは逆の流れも見て取れる。たとえば、標準語内部の文体の細分化が進んでいる。また、本来はボヘミア地方の地域間方言であった共通語 *obecná čeština* の力が増してきており、これを守り育てチェコ全体に広めるべきか、それとも地域方言と標準語のみにして共通語を排除すべきなのか、専門家たちの間でも意見の一致を見ていない。

1990年代以降の社会的な変化に伴って、チェコ語は多くの外来語を、とりわけ英語から受け入れるようになっている。したがって、チェコ語の特質上、新しく受け入れた語をどのパラダイムに組み込むのか、たえず決めなければならない。また、語彙そのものではなく、形態素を受け入れる例もある。例えば、EU加盟に伴って接頭辞 *euro-*を伴う語が増えている。さらに、携帯メールの普及によって、文構造がシンプルになってきているという報告もされているが (O češtině 2007:56-65)、これが標準語の規範にまで及ぶまでには、時間を要するはずである。

2. 現代チェコの言語政策

2.1. マイノリティ言語に対する政策

マイノリティ言語に対する現在の政策の基礎となっているのは、「2001年7月10日に成立した少数民族に属するものたちの権利といくつかの法改正に関する法律」Zákon ze dne 10. července 2001 o právech příslušníků národnostních menšin a o změně některých zákonů (No. 273/2001)である。この法律により、その民族の言語形態で名前をつける権利や、会社をはじめとする機関や通りの名前などを多言語表記にする権利、役所、裁判所、選挙で少数言語を用いる権利、少数言語で教育を受け、その文化を守り育てる権利、少数言語で情報を発信し受容する権利などを保証している。この法律は、いわば大枠を定めたものなので、具体的にはさらなる法律を制定して実行に移す必要がある。たとえば、教育に関しては、2004年に学校法が改正になり、マイノリティ言語の教育と支援に関する具体策が盛り込まれた。

しかし、上記の法律で守られている「マイノリティ言語」とは、チェコの市民権を有するマイノリティの言語に限られている。今後は長期滞在者へのさらなる配慮が求められる。

2.2. チェコ語の政策

第1章で述べたように、チェコ共和国は目下のところスロヴァキア共和国が定めたような言語法をもたず、従ってチェコ語は国家語 státní jazyk であるという規定がされていない。1999年にチェコ語をチェコ共和国の国家語と定めるという法案が出されたが、採択されなかった。主因のひとつはスロヴァキア語の扱いをめぐる意見の対立だったといわれている。チェコ語をチェコ共和国の国家語と定めた場合、スロヴァキア語をチェコ語の方言として取り込むのか、外国語とみなして排除するのかという点である。1918年以来ずっとかかえてきた、相互理解が可能だからこそ生ずる問題が、いまだにチェコ国内で解決していないことの現われといえよう。

国家語としての規定はされていないとはいえ、1990年代初頭にさまざまな法律によって、国家語の下のレベルでの規定はされている。たとえば、チェコ語はチェコ共和国の公用語であり、折衝や職務に用いるべき言語であり、教育で用いる言語であると定められている。教育の場、すなわちチェコ共和国内のあらゆる段階・種類の教育機関で、教師は標準チェコ語 spisovná čeština の文章語スタイルと口語スタイルを用いて教えるべきとされているのである。そして、大多数の学校に「チェコ語」という科目がある。外国語学校（チェコ語以外の言語で教育をおこなう学校）と二言語併用学校（チェコ語ともう1つの言語によって教育をおこなう学校）では、いくつかの科目がチェコ語以外の言語によって教えら

れている。しかし、高校の卒業試験にあたる *maturita* はすべての科目がチェコ語によって作成される。

3. 外国語教育

3.1. 20世紀の流れ

3.1.1. 第二次世界大戦終了まで

1918年からボヘミア・モラヴィア保護領になるまでの20年間、外国語教育は主にドイツ語とフランス語であり、保護領時代はドイツ語中心だった。

3.1.2. 戦後

この状況が第二次世界大戦後に大きく変化する。ロシア語が必修となったのである。1948/49年度から高校卒業試験の必修科目にロシア語が入った。高等教育機関では、ロシア語の専門用語を覚え、専門文献をロシア語で読むことが要求されるようになる。戦後まもなくの時代はチェコ人向けのロシア語教材も十分になく、モスクワで出版されたものをそのまま用いていたが、この状況は徐々に改善され、さまざまなレベルの教材が充実し、ロシア語・ロシア文学研究も盛んにおこなわれるようになった。1970年代には、ロシア語サマーキャンプ、ロシア語弁論大会が毎年開催されるようになり、また、ロシア語科の学生は1セメスターを必ずソ連邦内のロシア語講座を受講するよう義務づけられた。こうして、運用面での向上も図られるようになったのである。

ロシア語以外の外国語は高校から学ぶことができた。必修のロシア語に加えて、英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語から1つ選択するという方式が一般的だった。時間数は限られていたものの、外国語科目はクラスを2つないし3つに分けて少人数教育をおこなっていた。英語の重要性は認識されながらも、一般には必修科目となっていなかった。当時、特定の専門分野、たとえば核物理学などは英語の文献を読む必要があったので、大学の一部の学部・学科で英語が必修となっていた程度である。ドイツ語を選択する生徒や学生は相変わらず多かった。ドイツ語圏と国境を接しており、しかも当時の東ドイツは政治体制を同じくする国家だったので学びやすかったのである。フランス語の人気は戦前ほどではなくなり、かわりにスペイン語への関心が高まった。ロシア語以外の言語を学び始めるのが高校からでは遅すぎると考える親たちは、こどもを早くから語学学校や講習会などに通わせた。1960年代には初等教育のレベルから複数の外国語を学ばせようとする動きがでてきた。3年生からロシア語、5年生から英語もしくはドイツ語（フランス語も選択肢に入ることがあったが稀）を学ぶという方式を取ったが、すべての小学校に導入された

わけではなく、都市部の限られた数の小学校でしか実施されなかった。

3.2. 最近の状況

状況が決定的に変化したのは1990年である。この年に学校法 *školský zákon* が新たに制定された。これによって、ロシア語がもっていた特権的な地位は失われ、選択外国語のうちの1つにすぎなくなった。高校卒業試験で受験すべき外国語科目は、習った外国語のうち1つを選べるようになった。外国へ自由に行けるようになり、旅行やビジネスの機会が増加したことともない、外国語学習熱が高まった。とりわけ運用能力を身に付けようと熱心に取り組むようになった。

今日、小学校4年生（場合によっては3年生）から、外国語が必修科目として教えられている。第2外国語の学習は中等教育機関に進んだ段階（15歳）で始まる。しかし、職業高校など、大学進学を目標としない中等教育機関では、外国語は1つ学ぶだけでもよい。教育省は、将来英語を小学3年生から必修とし、第2外国語は6年生から開始する計画を立てている（*Neustupný a Nekvapil 2003:292*）。

英語に比べてドイツ語への関心は徐々に落ちているとはいえ、現在大半の生徒・学生は英語とドイツ語を学んでいる。1998/99年度の統計では、約390000人が小学校で英語を、約344000人がドイツ語を学んでいた¹⁰。これが、2005/06年度になると、英語の履修者は約503000人、ドイツ語の履修者は約167000人である¹¹。これは小学生の97,9パーセントが英語もしくはドイツ語を学んでいることになる（*Nekvapil 2007b*）。また、1998/99年度に、ギムナジウム（大学進学を目指す中等教育機関）では約112000人が英語、約85000人がドイツ語を選択した¹²。2005/06年度は、ギムナジウムと職業高校をあわせて、英語約399000人、ドイツ語約288000人という統計がでている。この現状を新聞も反映している¹³。チェコ国内に居住する外国人向けに、英語新聞・ドイツ語新聞が毎日発行されているが、それに以外に、チェコの代表的な新聞「リドヴェー・ノヴィニ」も、毎週木曜日に、

¹⁰ 以下、フランス語 8700人、ロシア語 1000人、スペイン語 500人（いずれも概数）と続く。この年度は他に「その他の言語」の履修者が14人となっている。

¹¹ 以下、フランス語 7300人、ロシア語 5700人、スペイン語 1200人（いずれも概数）。他に、イタリア語 44人、「その他のヨーロッパ語」29人、「その他の言語」48人となっている。

¹² 以下、フランス語 16000人、スペイン語 3200人、ロシア語 2900人、イタリア語 700人（いずれも概数）。他に、「その他のヨーロッパ語」4人、「その他の言語」33人となっている。ギムナジウムでは、ドイツ語履修者より英語履修者の方が多いが、職業高校だと、この関係が逆転する。地理的な要因などから、英語圏で働くよりドイツ語圏で働くほうがイメージしやすいからではないかと推測されている（*Neustupný a Nekvapil 2003:293*）。

¹³ 以下、フランス語 40400人、スペイン語 15000人、ロシア語 14000人、イタリア語 1400人（いずれも概数）。他に、「その他のヨーロッパ語」112人、「その他の言語」304人。

英語およびドイツ語の紙面を設けている。記事で用いられた語彙のリストがチェコ語と対応させて載せられていることから、明らかにこれらの言語を学習するチェコ人向けの記事であることがわかる。

二言語併用のギムナジウムもできた。このような学校では、チェコ語に加えて英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、イタリア語のうちのどれか1言語を1年次に週20コマ集中的に学習し、2年次からはその言語で数学、物理、化学、歴史、地理などの科目の教育を受ける。1999/2000年度の段階で、このようなギムナジウムは、ドイツ語5校、フランス語5校、英語4校、スペイン語2校、イタリア語2校ある。さらに、2003年、ロシア語とチェコ語の二言語併用ギムナジウムも1校開校した。既述のごとく、高校卒業試験はすべての科目がチェコ語により作成されるが、たとえば、ズノイモやプラハにあるドイツ語・チェコ語併用のギムナジウムで学んだ生徒には、オーストリアの卒業試験を受験する機会も与えられている。

あらゆる大学は卒業要件として、1つないし2つの外国語の試験に合格することを挙げている。通常は2セメスターの履修だが、学生の目的によっては4セメスターになることもある。学生は通常ギムナジウムで学習した言語を履修する。

大学の教育はチェコ語でなされるが、チェコにある大学全30校のうち、25校が英語、16校がドイツ語、3校がフランス語で教育をおこなうコースを用意している。このようなコースで学ぶ外国人留学生も少なくない。

4. 現地調査報告

2007年11月16日から25日までチェコ共和国に滞在し、外国語教育のあり方を調査した。

4.1. 書店での調査

11月20日に首都プラハにある大型書店の外国語学習コーナーにどんな言語を扱った書籍が並んでいるのか、次ページに紹介する。表における◎は書籍数が非常に多い言語、○は◎について多い言語で、それ以外の言語の数字は書籍数を示している。

この大型書店は一般の人々を対象としたものであり、特別な専門書店ではない。もっと多様な教科書を手に入れようという場合には、大学出版局へ行けばよい。たとえば、カレル大学哲学部では現在、約50言語が教育されているので、それらの言語の教科書を大学出版局で探せば見つかる可能性がある。しかし、それらは大学生が教室で学ぶための教材であり、事情が異なる。

この表は、一般の人々がどのような外国語に興味があるのか、あるいは何か外国語を学習したくなったときに2007年の11月末の時点でどのような選択肢があるのかということを示している。ここには、教科書・独習書の他、辞書・語彙集や旅行会話集なども含めた。

◎ 英語	3	ハンガリー語
◎ ドイツ語	3	ノルウェー語
○ フランス語	3	スロヴァキア語
○ スペイン語	2	ブルガリア語
○ ロシア語	2	中国語
○ イタリア語	2	ヘブライ語
	2	日本語
その他の言語	2	オランダ語
10 ギリシア語	2	スロヴェニア語
9 アラビア語	2	トルコ語
7 クロアチア語	1	アルバニア語
6 ポルトガル語	1	ベンガル語
6 スウェーデン語	1	インドネシア語
6 ラテン語	1	ラトヴィア語
5 フィンランド語	1	ペルシア語
5 ポーランド語	1	ロマ語
5 ウクライナ語	1	ルーマニア語
3 デンマーク語	1	チベット語
3 エスペラント語	1	タイ語
	1	ヴェトナム語

◎印は出版点数がとくに多い言語である。チェコ共和国の書店においては、英語とドイツ語は別格の存在であり、この2言語だけは書店で特別に大きなスペースを占めていた。英語教材とドイツ語教材の数にそれほど大きな差は見られない。既述のごとく、教育の場でもこの2言語を選択する生徒が圧倒的に多いことから、これは当然である。教材の場合、レベル別に細かく設定されたものと並んで、高校生以下を対象としたものは学年別に編纂されている。

時代の要請に合わせて新しい教材が次々と出版される中、一昔前の「名著」(?)もまた

健在である。出版点数が多いので数値で示すことは難しいが、ページを開けば活字がつぶれかけているもの、社会主義時代を想わせるイラストのものもあり、これらが新刊に混じって現役として書店に並ぶ。

反対に外国で出版された教材をいち早く取り入れているのも、英語とドイツ語で顕著である。現地の出版物をそのまま並べていることも多いが、チェコ語で解説を付した教材もある。

音声付教材も増えている。別売りカセットテープはなぜか「貴重品」扱いで、多くの場合、レジに立つ書店員の後ろにあるガラスケースの中に収まっており、しかもケースには鍵がかかっている。一方で CD 教材も外国出版物を中心に目立つようになってきた。この場合には本と CD がセットで売られている。価格は日本に比べて著しく高い。

辞書についても、英語とドイツ語の場合、チェコ語との対訳辞典に加えて、さまざまな分野の専門用語辞典が揃っていた。チェコ国内で出版された書籍に加えて、輸入されたものも少なくないことは、教材の場合と同様である。なお、英語はイギリス英語の教材が中心である。

英語について、検定試験対策本および予想問題集が多数発行されていることは、日本と同様である。ただし、そのほとんどは TOEFL であり、TOEIC 関係の教材はほとんどない。これは日本のように英語力の基準を TOEIC とする発想が、チェコ共和国ではないことを意味する。

○印のついた 4 つは、◎について書籍数の多い言語である。このカテゴリーに属するフランス語、スペイン語、ロシア語、イタリア語は、それぞれの言語ごとに 1 つないし 2 つの書棚 (1 つ 5~6 段) が割り当てられている。第 3 章で述べたように、この 4 言語は英語とドイツ語について選択される可能性のある外国語である。

これらの 4 言語に関しては輸入されたものはほとんどなく、チェコで出版されたものが主流である点が特徴的である。それぞれの言語について、教科書、辞書、会話集の合計の冊数にそれほど差があるわけではないが、辞書の充実度にはばらつきがある。ロシア語の辞書は 1990 年まで戦後の外国語教育の中心を担ってきただけあって、さすがに種類や登録語数が多い。一方、最近人気の出てきたスペイン語、イタリア語の対訳辞典は全体的に登録語数がそれほど多くなく、また例文があまり載っていない。大辞典の編纂はこれからというところだろうか。

これら 4 言語の中で、際立っているのは、ロシア語教材の復調である。1990 年代に激減

したロシア語教材は、最近数の上ではまた増えてきた¹⁴。ただし新しく出版されたロシア語教材は、ビジネスレターの書き方を始めとする実用的なものが主である。新しい文法書は全体的に少なく、かつて出版された研究書に近いようなものが復刊されている例も見られた。

◎と○以外の、印のない言語はその他の諸言語である。書店では言語名のアルファベット順に並んでいたが、ここでは冊数順に並べ替えて提示した。同じ冊数であれば、言語名のアルファベット順になっている。

この中で一番多いギリシア語は、古典ギリシア語も現代ギリシア語も区別なく配架されており、合計で10冊である。

日本の書店でのラインナップと比較すると、明らかにヨーロッパの言語が多く、アジアの言語が少ないことが特徴的である。

たとえばクロアチア語が「その他」の中では3番目に多く、7冊あるが、これは日本と大きく違う。クロアチアの海岸地方は夏の休暇先としてチェコ人の間で人気がある。そのためか、しっかり学習して身につけることを目標とした教材よりも、手軽な旅行会話集が主流である。

スラヴ系言語の教材が多いことも目立つ。チェコ語と系統の近いこれらの言語については、社会主義の時代が過ぎ去ったあとも、地理的な近さや人的交流の必要性から、辞書や会話集が求められることは当然かもしれない。クロアチア語以外にもポーランド語、ウクライナ語、スロヴァキア語、ブルガリア語、スロヴェニア語といった、日本ではほとんど出版されていない諸言語の教材が充実している。ただし、かつて「セルビア・クロアチア語」と呼ばれ、同一言語の2つのヴァージョンのうち的一方であったセルビア語を扱った教材は、見当たらなかった。

偶然であろうが、朝鮮語・韓国語の教材も調査した日のみならず滞在中には見かけなかった。

いわゆる新マイノリティの言語であるウクライナ語、ヴェトナム語の教材は、チェコ国内にウクライナ語話者、ヴェトナム語話者をたくさん抱えるわりには、それほど多くない。既述のごとく、彼らに対してはむしろチェコ語を教育することが重視されており、彼らの言語を学ぼうとするチェコ人は少ないのであろう。伝統的マイノリティのうち、ロマ語の教材が1冊というのも同様の理由が考えられる。

¹⁴ Neustupný a Nekvapil は第二外国語としてのロシア語学習者の増加を予想している。理由としてつぎの3点を挙げた。1. 類似の構造をもつスラヴ系の言語は学びやすい 2. 教師の数が多。3. かつて強かったイデオロギーに対する嫌悪感が薄まり、ロシアをはじめとする旧ソ連邦との経済的なつながりが強まりつつある。(Neustupný a Nekvapil 2003:296)

チェコ共和国では、調査した大型書店に限らず、どの書店でも外国語教材が多い。首都プラハの場合、外国人向けチェコ語教材や会話集が並ぶのは、外国人観光客を数多く受け入れていることを考慮すれば当然であろう。だがそれだけでなく、チェコ人が外国語を学習するための教材までもが、かなり小さな書店でも充実しているところが興味深い。それも英語やドイツ語といった主要言語に限らず、外国語の種類がそもそも多い。日本の小型書店ではまず見られない傾向といえよう。

4.2. 授業見学とインタビュー

11月22日は、カレル大学哲学部でヤスナ・ホンザク＝ヤヒッチ教授 Prof. Jasná Honzak-Jahić の担当するスロヴェニア語の授業を見学し、その後のオフィスアワーにカレル大学のスロヴェニア語教育に関して同教授にインタビューをした。

スロヴェニア語教育の歴史の長いカレル大学でこの言語がどのように教育されているのか、しかも同じスラヴ系の言語を教える際、どのような教材を用いてどのようなレベルの教育をおこなうのか興味があった。また、チェコもスロヴェニアも1990年代初頭に社会主義体制から資本主義体制へ移行したのち、独立する（チェコは1993年、スロヴェニアは1991年）という政治的な大転換を経験した。それにともなって、それぞれの言語をとりまく環境が大きく変化した。そして、2004年とともにEUに加盟したことにより、チェコ語とスロヴェニア語はEUの公用語となっている。このような流れを受けて、一方では英語を初めとする外国語学習熱がかつてなかったほど高まり、他方では、自分たちの言語を外国人に対してどのように教育すべきかということにますます関心がもたれるようになっていく。チェコ語はCEFR（チェコ語ではSERR=Společný evropský referenční rámec）に基づいてthreshold level（B1のレベルに相当）が出版され、さらに、A1, A2, B2のレベルがネット上で発表されている¹⁵。外国人向けのチェコ語教科書も2007年あたりから、これらのレベルを明示したものが出始めた。一方で、スロヴェニア語はCEFRに対する取り組みがどこまで進んでいるのかということにも関心があった。以下、インタビューで得られた情報と授業見学のレポートである。

1914年以来、カレル大学ではスロヴェニア語の授業が開講されている。これはスロヴェニア国外の教育機関でなされるスロヴェニア語教育としては、ごく早い例である。1991/92

¹⁵ Univerzita Karlova v Praze Ústav bohemistických studií a Katedra obecné lingvistiky a fonetiky Filozofické fakulty a Ústav jazykové a odborné přípravy ed. *Prahová úroveň- čeština jako cizí jazyk*. Strasbourg: Council of Europe, 2001.
Referenční úroveň pro češtinu jako cizí jazyk – MŠMT ČR.
<http://www.msmt.cz/mezinarodni-vztahy/referencni-urovne-pro-cestinu-jako-cizi-jazyk/>

年度までは選択必修科目の扱いだったが、翌年度からはダブルメジャーの枠内で独立した「卒論科目」となっている。スロヴェニア語学以外のもう1つの専攻は、スラヴ学、クロアチア語学、歴史学、ブルガリア語学、チェコ語学を学ぶ学生が多い。

見学した授業は11時40分から12時25分までの1コマで、スロヴェニア語のレッスンだった。この授業以外にも、2007/08年度は「スロヴェニア語史」、「社会言語学の立場から見たスロヴェニア語の特徴」および「卒論演習」が開講されている。当日出席した学生は、4-5年生の7名（男性3名、女性4名）。全員出席とのことである。授業内容は文法事項の説明と講読だった。使用教材は、ホンザク＝ヤヒッチ教授編纂による教科書 *Slovenščina ni težka* とプリント7枚である。最初に代名詞 *kaj-kdo*、関係代名詞 *kar-kdor* の用法を確認し、練習問題を解いた後、環境問題を扱った記事を講読した。その際、代名詞や関係代名詞の用いられた文はチェコ語へ訳していた。解説や質問のために教師の用いる言語は終始スロヴェニア語だった。オーソドックスな授業の進め方である。系統とタイプのまったく異なる日本語話者の筆者から見ると、文法内容のシンプルさに比して用いる語彙数が格段に多い。文法構造が類似し語彙も共通のものが多いという同系のチェコ語話者であるからこそ、ついていける授業である。教師の説明や指示も受動的には理解できているようで、教科書とプリントを交互に使い分ける授業にも全員が難なく参加していた。

このように、受動的には一定のレベルに早く達してしまう場合、能動的な運用能力を獲得するにはまた別の努力が必要となる。発音や形態論（語尾のつけ方）がいつまでたっても「チェコ語風」で、しかも、それでスロヴェニア人に理解できないわけではない。したがって、「正しい」スロヴェニア語で話し書けるようになるには、それなりに時間がかかるということである。

CEFR に関しては、チェコ語のほうがスロヴェニア語よりも一歩先んじていることがわかった。チェコ語の *threshold level* を参考としてスロヴェニア語も同様の *Sporazumevalni prag za slovenščino* が2004年にリュブリャーナから出ているが、それ以外のレベルに関してはまだ発表されていないようである。また、CEFR を基にした教材作成は、本国スロヴェニアでは始まっているが、ホンザク＝ヤヒッチ教授はこのプロジェクトに関わっていないということだった。

5. 結論にかえて

今、チェコ語をめぐる環境が大きく変わろうとしていることは確かである。

しかし、「今」をとらえ、正確かつ客観的に記述することは非常に難しい。遠く離れた地であって、入手できる限り最新とはいえ、2-3年前の状況を記述した文献をもとに報告す

る以外にない。母語話者でもないものが、たかだか10日ほど現地に滞在して資料収集やインタビューをしてみたところで、この差を埋めることはほぼ不可能であろう。

以上のように、このテーマを扱うには条件がよくないが、ここまで述べたことから、以下のようにまとめられる。チェコ語は、もしくはチェコ共和国の言語政策は、現在さまざまな問題を抱えている。それらの問題は数十年来ひきずってきたものもあれば、社会の急激な変化に伴って新しく浮上したものもある。そのうち、マイノリティ言語をはじめとするいくつかの問題については、放置するもしくはチェコなりのペースでゆっくりと解決してゆくことが許されなくなっている。今はEUの一員として共同歩調をとりながら、解決に取り組むことを要求されるからである。チェコ人はよく、自分たちのことを「小さな民族」と呼びならわしてきた。結果として、チェコ語を外国人に教えるよりも、むしろ自ら外国語を学ぶことのほうに熱心だった。今でもこの熱心さに変わりはないどころか、ますます熱を入れて学んでいる。しかし、同時にその逆の流れである、チェコ語を外国人に教えることにも、これまで以上にエネルギーを注いでいる。EUの公用語となったこと、国内に居住する外国人長期滞在者の数の増加が今後ますます見込まれるからである。

参考文献

- Čechová, Marie. Jazyk vyučovací. in: *Najnowsze dzieje języków słowiańskich. Český jazyk.* ed. : Kořenský, Jan. Opole: Uniwersytet Opolski - Instytut Filologii Polskiej, 1998:101-109.
- Honzak Jahić, Jasna. Slovenščina na univerzi v Pragi. in: *Center za slovenščino kot drugi/tuji jezik.* Eds. Bešter, Marja in Kržišnik, Erika. Ljubljana: Center za slovenščino kot drugi/tuji jezik pri Oddelku za slovanske jezike in književnosti Filozofske fakultete v Ljubljani, 1999: 101-104.
- Kamiš, Karel. Čeština a romština. in: *Najnowsze dzieje języków słowiańskich. Český jazyk.* ed. : Kořenský, Jan. Opole: Uniwersytet Opolski - Instytut Filologii Polskiej, 1998:51-60.
- Kořenský, Jan. Jazykové právo a jazyková politika. in: *Najnowsze dzieje języków słowiańskich. Český jazyk.* ed. : Kořenský, Jan. Opole: Uniwersytet Opolski - Instytut Filologii Polskiej, 1998:95-101.
- Lipowski, Jaroslav. *Konvergence a divergence češtiny a slovenštiny v československém státě.* Wrocław: Wydawnictwo Uniwersytetu Wrocławskiego, 2005.
- Lotko, Eduard. Čeština a polština. in: *Najnowsze dzieje języków słowiańskich. Český jazyk.* ed. : Kořenský, Jan. Opole: Uniwersytet Opolski - Instytut Filologii Polskiej, 1998:33-43.
- Nekvapil, Jiří a. Kultivace (standardního) jazyka. in *Slovo a slovesnost* 68. Praha 2007: 287-301.

Nekvapil, Jiří b. On the Language Situation in the Czech Republic: What Has (not) Happened after the Scession of the Country to the EU. in: *Sociolinguistica* 21, 2007: 36-54.

Neustupný, J. V. a Nekvapil, Jiří. Language Management in the Czech Republic. in: *Current Issues in Language Planning*. vol. 4, No. 3&4. Clevedon: Multilingual Matters, 2003: 181-366.

O češtině. Praha: Česká televize- Edice ČT. 2007.

Povejšil, Jaromír. Čeština a němčina. in: *Najnowsze dzieje języków słowiańskich. Český jazyk*. ed. : Kořenský, Jan. Opole: Uniwersytet Opolski - Instytut Filologii Polskiej, 1998:43-51.

Šimek, Václav. Výuka cizím jazykům. in: *Najnowsze dzieje języków słowiańskich. Český jazyk*. ed. : Kořenský, Jan. Opole: Uniwersytet Opolski - Instytut Filologii Polskiej, 1998:109-116.

Zpráva o situaci národnostních menšin v České republice za rok 2001. Praha: Úřad vlády ČR. Sekretariát Rady vlády pro národnostní menšiny, 2002.

Zpráva o situaci národnostních menšin v České republice za rok 2004. Praha: Úřad vlády ČR. Sekretariát Rady vlády pro národnostní menšiny, 2005. On WWW at <http://www.vlada.cz/assets/cs/rvk/rnm/dokumenty/dokumenty_rady/zprava_mensiny04_p_rilohy.pdf>

関連サイト

ČSÚ. *Národnostní složení obyvatelstva*. 26. 10. 2006. (accessed: 03. 09. 2008) <<http://www.czso.cz/csu/2003edicniplan.nsf/p/4114-03>>

ČSÚ. *Zahraniční a vnitřní migrace*. 04. 2007. (accessed: 17. 04. 2008) <http://www.czso.cz/csu/cizinci.nsf/kapitola/ciz_migrace>